

# 英語を母語とする日本語学習者の促音知覚

－ 促音の後続子音に関する考察 －

安田寛二\*

(e-mail: kanji\_yasuda0614@yahoo.co.jp)

---

## 目次

---

1. はじめに
  2. 先行研究
  3. 調査方法
  4. 分析方法
  5. 調査結果
  6. 考察
  7. まとめと今後の課題
- 
- 

## 1. はじめに

本研究は英語を母語とする日本語学習者の促音知覚に関するものである。先行研究で得られた結果を基に仮説を設定し、調査を通してそれを検証することを目的とし、特に促音の後続子音に着目して考察する。

---

\* 所属：南山大学

皆川（1996）によると、かねてから日本語教育の現場では、日本語学習者にとって特殊拍の知覚・生成が困難であると言われている。戸田（2003）では、日本語学習者による特殊拍の知覚と生成の問題は以前から指摘されており、特殊拍の脱落や挿入が起こることが知られていると述べられている。戸田（2007）では、促音の習得は単に正確な発音の習得だけではなく、文字・語彙の習得や文法習得のためにも必要であると主張している。そのため促音の習得が不可欠であるとしている。これらの主張からも日本語学習者にとっては促音習得の重要性が伺える。

促音とは<sup>1)</sup>、無声の阻害音からなる重子音の前半部であり、つまる音とも言われる。仮名表記したときに「っ」で表せる音であり、音素記号では/Q/<sup>2)</sup>と表す。単独では用いられない。特殊拍の一つであり、自立拍より持続時間は短いものの、日本語話者には一拍分の長さを持つと考えられる。語頭には生起せず、語中において、通常母音の後ろ、かつ/p/、/t/、/s/<sup>3)</sup>、/k/の前だけに現れる。次の拍の始めの子音と同じ調音の構えで一拍をなす。外来語<sup>4)</sup>や方言音<sup>5)6)</sup>では、例外的に、

- 1) 金田一、林、柴田（1988）『日本語百科大事典』、飛田（2007）『日本語学研究事典』、日本語教育学会（2005）『新版 日本語教育事典』を参照。
- 2) 服部四郎（1960）の記述にならった。
- 3) 筆者の立場では、「し、しゃ、しゅ、しよ、ち ちや ちゅ ちょ つ」に関しては/s/、/t/の異音とみなす。しかし、本研究では/s/（例：さ、し、せ、そ）と/ʃ/（例：し、しゃ、しゅ、しよ）は区別して調査を行った。
- 4) 例えば『日本語学研究事典』（2007）によると、ヘッド (head) やバッジ (badge)、バッグ (bag)、マッハ (mach)、学校現場で用いられる用語に、アッパース朝、アッラーなどがある。
- 5) 平山・大島（1975）によると、東海・東山方言では、飛騨大井川上流の旧井川村などの各方言の、サッジョー（三升）、コッド（今度）、ビッポー（貧乏）、カッダ（呑んだ）、四国方言では、徳島県那賀郡木頭村北川のオヨギョル（泳いでいる）、トッビョル（飛んでいる）、薩南諸島方言では、イッガ（行くだろうよ）、イッド（行くぞ）などがある。『日本語百科大事典』（1988）では、新潟の一部では「牛蒡」を[gobbo]、「そんな」を[sogge]がある。
- 6) 加えて、方言音の促音として、『日本語百科大事典』（1988）では、東北北部や九州南部では、促音が音声的に短く、音韻論的に拍として独立せず、「学校」[gakko:]は[gako]のように2拍となる。シラビーム方言とも言われる。また沖縄では「雨」を[ʔame]新潟の一

/g/、/d/、/b/、/z/、/h/、/r/などの前に現れることもある。感動詞やオノマトペ<sup>7)</sup>などの「あっ」、「きゅっ」で表す音のように語末で急に呼気を止めて発する場合にも観察される。強調や感情を込めて用いられるとき、促音が挿入されることがある（やはり→やっぱり）。

## 2. 先行研究

### 1) 促音の後続子音について

戸田（2003）では、英語母語話者で上級日本語学習者による促音の知覚は促音の子音種の影響を受け、子音種が閉鎖音である場合、摩擦音と鼻子音に先行して習得することが示唆されると述べられている。また本橋（2005）では、日本語学習者の促音知覚において、促音の後続子音が閉鎖音[t]、[k]の場合は知覚しやすく、一方で後続子音が摩擦音[s]の場合は閉鎖音よりも知覚しにくいとしている。山田（1997）では、日本語学習経験のないアメリカ英語母語話者を対象とした実験で、無声摩擦音が促音の後続子音であると学習が困難なことが明らかになっている。

### 2) 促音を含む重子音の持続時間について

本橋（2010）で行われた、英語を母語とする日本語学習者を対象とした実験の中で、促音を長音だと知覚する結果が誤答の80%に及んでいたと報告されている。本橋（2010）の調査では摩擦の持続が正しい促音の知覚を妨げていると仮定している。中岡・村木（1990）では、日本人の普通子音と促音を含む重子音を比較した結果、閉鎖音の場合、呼気の閉鎖の持続時間が普通子音のときよりも2～3倍近くになり、摩擦音の場合も、摩擦音の持続時間が普通子音のときよりも2～

部では「見られる」を[mira?ru]、のような接続があり、鹿児島では母音脱落により「靴」が[ku?]のような現象もある。

7) オノマトペは、『日本語百科大事典』（1988）によると、ニュアンスの微妙な違いを表すのに重要な働きをするものとして、撥音と促音などが用いられている（コロリ、コロッ、コロン）。

3 倍近くになると報告している。城生（2001）では「鏡に映る鉛筆坂の学校」という文における「学校」の促音の後続子音である閉鎖音[k]の持続時間が、無促音語の閉鎖音の 4～6 倍を要していると報告している。

### 3) 先行研究の問題点

本研究は先行研究で得られた結果の検証と、その考察なので、先行研究の問題点を解決するようなものではないが、先行研究の問題点を挙げる。先行研究の中では促音を長音としている原因を後続子音の摩擦音の持続だと仮定しているものがあるが、なぜ学習者が長音だと知覚してしまうのか、学習者がどのように聞こえているのかは、管見の限り明らかになっていない。また、初級学習者での実験が多く、レベルが上がると促音知覚に変化があるのかは、管見の限りでは不明である。

### 4) 仮説

以上、先行研究をふまえて、以下のような仮説を設定する。

仮説Ⅰ：促音の後続子音が閉鎖音のときよりも、摩擦音の方が促音知覚がより困難になる。

仮説Ⅱ：後続子音が摩擦音のとき、促音を長音<sup>8)</sup>だと知覚する。

## 3. 調査方法

南山大学外国人留学生別科の学生 23 名に調査を依頼し、うち英語を母語とする日本語学習者 12 名（初級学習者 4 名、中級学習者 8 名）のデータを抽出し、調査を行った。本調査で区別する初級、中級は南山大学外国人留学生別科で行われたプレースメントテストを基にしている。

学習歴、年齢、出身国、母語、クラスなどを問うアンケートをとり、その後、音声ファイルを再生し、音声を聞かせ、チェックを入れてもらう。解答方法は石澤（2011）を参考にし、図 1 のような形式を取った。長音記号を用いているため、

8) 本研究では長母音のことを長音とする。

それに合わせ、促音の表記もカタカナにした。

例) とっても	【1】( )1: ●●●●	
	( )2: ●ッ●●●	
	( )3: ●—●●●	解答2
	( )4: ●●ッ●●	
	( )5: ●●—●●	

図1 解答用紙の一部

解答を始める前に、解答方法を学習者が全員理解するまで説明し、その後、調査を開始した。

問題は40問（促音を含む語は24問、うち無意味語2問）あり、残りはダミーの語を入れた（表1）。10秒間に2回音声流した。解答時間は約7分。本調査が学習者に不利益がないことを示し、気軽に受けてもらうように説明した。

○促音が含まれる語の特徴

- ・ 全て4拍語<sup>9)</sup> (ex. せっせと、かえって)
- ・ 後続子音 [s] (ex. せっせと)、[t] (ex. とつとと)、  
[k] (ex. ごせつく)、[ʃ] (ex. みっしり)
- ・ アクセント
  - 2拍目に促音を含む語 (せっせと/H L L L、れっきと/H L L L、もっさり/L H H L)
  - 3拍目に促音を含む語 (かえって/H L L L、かぎっこ/L H H H、ごせつく/L H L L)
- ・ 促音の位置
  - 2拍目に促音があるもの (ex. とつとと)
  - 3拍目に促音があるもの (ex. ふるって)

<sup>9)</sup> 感動詞やオノマトペに現れる「やばいっ」や「っあ」のような語頭、語末の促音を含む語はない。

全ての促音を含む調査語彙には後続子音、アクセント、促音の位置の 3 要素が含まれる。

ex. 「とつと」の場合→後続子音は[t]、アクセントはH L L L、促音位置は2拍目

本調査では、アンケートで出身国とクラスなどを書いてもらったため、個人情報が含まれる。また、結果を知りたい学習者が連絡先を書いたため、個人を特定できてしまう可能性がある。事前に本調査について説明をし、個人情報に関することや、解答用紙およびデータは外部に漏れないように取り扱うことを説明した。個人情報は論文執筆後、速やかに破棄することを説明した。これらの説明に同意した学習者だけに本調査を行った。

01 かえて	L H H	21 しいっし	L H L L
02 せっせと	H L L L	22 みっしり	L H H L
03 かえって	H L L L	23 すっこむ	L H H L
04 とつと	H L L L	24 いだす	L H L
05 ビロード	L H H H	25 ケーブル	L H H H
06 れっきと	L H H H	26 かやく	L H H
07 こしお	L H H	27 ひってき	L H H H
08 かぎっこ	L H H H	28 ござっそ	L H H H
09 たくす	L H L	29 もっさり	L H H L
10 サーベル	H H H H	30 こしき	H L L
11 おさっし	L H H H	31 しっさく	L H H H
12 はっしと	H L L L	32 クルート	L H L L
13 レーヨン	H L L L	33 いっしき	L H H H

14 でにっし	H L L L	34 ほっとく	L H H L
15 ふるって	L H H H	35 とくし	H L L
16 テノール	L H L L	36 ラードル	H L L L
17 ごせっく	L H L L	37 むっくと	H L L L
18 いちず	L H L	38 ふかって	L H L L
19 かやっく	H L L L	39 まじっす	H L L L
20 こずち	H L L	40 めりっさ	L H L L

表1 調査に使用した語彙リスト

## 4. 分析方法

仮説を検証するために、促音の後続子音別の正答率、後続子音別の誤答の割合をパーセントで表し、困難だと思われる後続子音を明らかにする。また、日本語学習者が促音を長音だと知覚するという先行研究の結果から、誤答の仕方について、「促音がない」、「促音を長音と誤答」、「促音位置を誤答」、「促音位置の誤答と促音を長音だと誤答（図4では、促音位置と長音を誤答）」の4項目を用い、どのように知覚し、誤答をしたのかもみる。その後、仮説と本調査の結果を照らし合わせ、検証する。

## 5. 調査結果

英語を母語とする日本語学習者12名のうち、初級学習者が4名、中級学習者が8名だが、本研究の結果、誤答をしたのは、初級学習者2名、中級学習者4名だった。

促音の後続子音別にみた正答率（表1）を見ると、後続子音が摩擦音[s]、[ʃ]のとき、正答率が閉鎖音[t]、[k]よりも低い。図2は誤答した解答を後続子音別

に分け、その数の割合を出したグラフである。90%近くの割合で、促音の後続子音が摩擦音での誤答が多く、促音知覚が閉鎖音よりも困難であることが伺える。このことから、仮説 I が支持される。

後続子音別正答率(%)			
[ʃ]	73.6	[t]	95.8
[s]	79.2	[k]	97.2

表 2 後続子音別にみた正答率 (%)

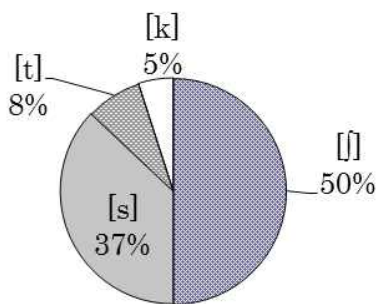


図 2 後続子音別にみた誤答の割合 (%)

初級、中級のレベル別で促音の後続子音別にみても、促音の後続子音が摩擦音のときは後続子音が閉鎖音のときよりも、困難であると言える。

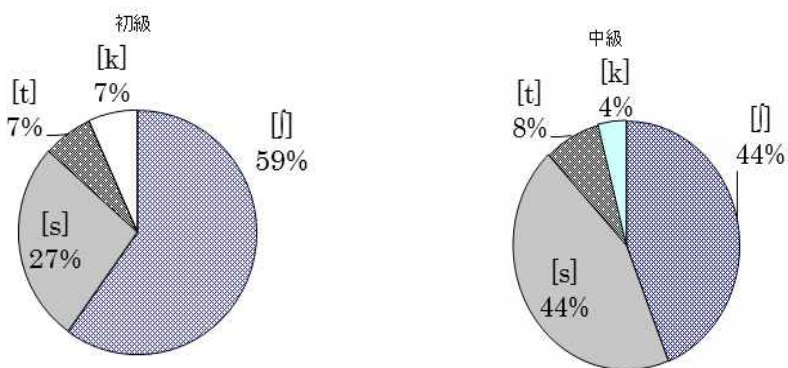


図 3 初級、中級別の後続子音別にみた誤答の割合 (%)

また、初級、中級のレベル別で促音の後続子音が摩擦音のときの誤答の仕方を誤答数から表した (図 4)。促音を長音とする誤答の仕方が初級、中級ともに他

の項目に比べ割合が高い。このことから、促音を長音だと知覚する結果があり、仮説Ⅱは支持される。さらに中級は、促音がないと知覚する誤答が初級に比べて多い。促音がないと知覚する誤答に関してはレベルによって異なる結果が出た。

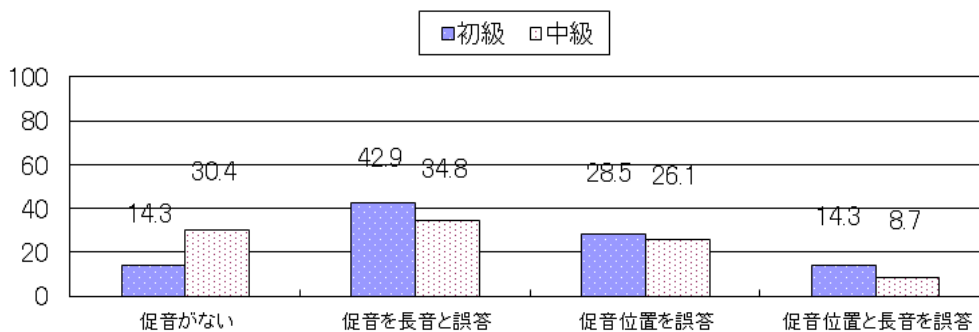


図4 後続子音が摩擦音時のレベル別での誤答の仕方と誤答率(%)

## 6. 考察

本研究の目的は、先行研究で得られた結果を基に仮説を設定し、調査を通してそれを検証することである。さらに、促音の後続子音に着目して考察する。先行研究の結果を基にした仮説（仮説Ⅰ：促音の後続子音が閉鎖音のときよりも、摩擦音の方が促音知覚がより困難になる。仮説Ⅱ：後続子音が摩擦音のとき、促音を長音だと知覚する。）は、両者ともに支持された。本調査の誤答はほとんどが摩擦音だったので、促音知覚が困難であるとされる理由として、摩擦音の持続時間による影響があると考えられる。その中でも誤答の仕方では初級、中級とも促音を長音とする結果が多かったことから、摩擦音は促音知覚と長音知覚にも影響を与えている可能性がある。仮説Ⅱで支持された結果の原因について考察すると、先行研究から中岡・村木（1990）の報告では、日本人の普通子音と促音を含む重子音を比較した結果、閉鎖音の場合、呼気の閉鎖の持続時間が普通子音のときよりも2～3倍近くになり、摩擦音の場合も、摩擦音の持続時間が普通子音のときよりも2～3倍近くになるとしている。そのため、促音の後続子音が摩擦音のと

きに促音位置に現れる摩擦の音が、無促音語の摩擦音よりも長く聞こえ、学習者はその長さを単に長音として知覚し、誤答したと考えられる。

学習者が促音を長音としたことに関して音響分析ソフトを用いた結果から考察する。図 5、6、7 は音響分析ソフト Praat を用いて、筆者の声をスペクトログラムで表したものである。図 5 の「とつと」という語のスペクトログラムをみると、重子音部分 [tt] に空白部分があるのがわかる。これは、重子音部分に無音状態があることを表している。しかし、図 6 の「さっさと」という語のスペクトログラムをみると、重子音部分 [ss] に黒く色がついていることがわかる。これが、促音位置に摩擦音が漏れ出ていて音として現れているということである。図 5 の重子音部分 [tt] が空白になるのに対し、促音の後続子音が摩擦音 [s] の場合は促音部分に摩擦音が現れるため、学習者が無音部分を頼りに促音知覚を行っている場合、促音の後続子音が閉鎖音のときよりも正しく促音知覚が出来ないことが推察される。これが、仮説 I で支持された結果の原因の一つであると考えられる。

加えて、本研究の結果において、中級学習者は、有促音語を聞いたとき、促音がないと誤答する割合が、初級学習者よりも目立った。それは、促音部分に摩擦音が現れると考えられることから、促音の後続子音が摩擦音の時は無音時間が閉鎖音の時よりも短い、あるいはないと考えられるため、促音知覚が困難となり、中級学習者は促音がないと誤答した可能性がある。

そして、中岡・村木 (1990) で述べられた、摩擦音の持続時間が普通子音のときよりも 2～3 倍近くになるという報告を図から観察すると、図 6 の「さっさと」は図 7 の「ささと」という語に比べ、摩擦音の持続時間が、およそ 2 倍長くなっていることがわかる。学習者は図のように持続時間が長くなった摩擦音の長さを単に長音として知覚し、促音知覚が困難となった可能性が考えられる。

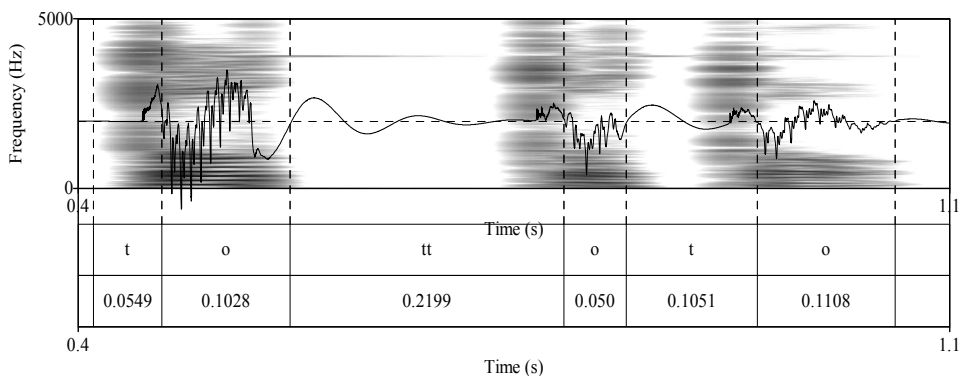


図5 「とっとと」のスペクトログラム

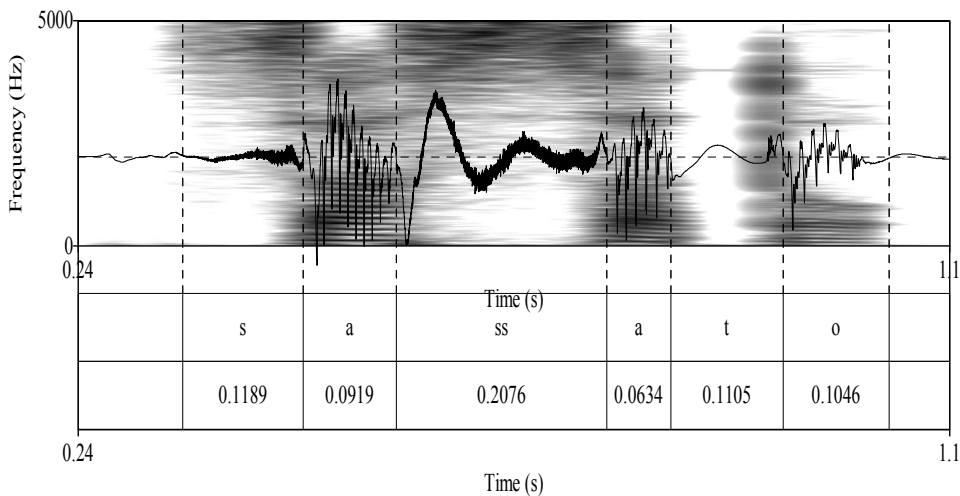


図6 「さっさと」のスペクトログラム

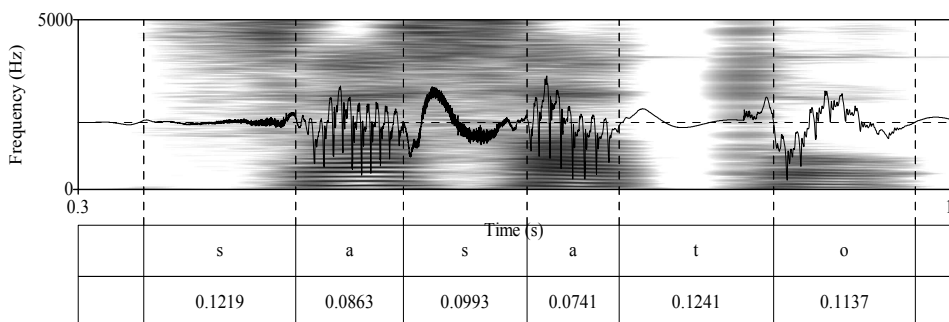


図7 「ささと」のスペクトログラム

本論文は促音の後続子音に関するものだが、日本語学習者が特殊拍の生成や知覚が困難だとされていることを考えると、促音の後続子音が摩擦音のときと比べて、困難ではないと考えられる閉鎖音のときも、実際は知覚が難しいとも考えられる。このことから、学習者にとって促音知覚が困難である要因として、促音の後続子音以外の要因も考えなければならない。その1つとして、促音の先行母音と後続母音が要因となっている可能性がある。大深（2003）では、日本語母語話者に対して、アクセント型と、促音語と無促音語の音響的特徴による促音判断境界値への影響を調べた結果、アクセントが頭高型でも、平板型でもともに促音語の方が、非促音語に比べ、促音の先行母音が長く、後続母音が短めだという結果が報告されている。また、大深・森・桐谷（2005）では、「うたたね」という語を基に作成した刺激語を用いて、促音の知覚に対する先行・後続母音長の影響について日本語母語話者を対象に実験を行った結果、促音を含む語の方が促音を含まない語に対して、促音の先行母音が長く、後続母音が短いときに促音が最も聞かれやすいという結果を報告している。図6、7のスペクトログラムをみても、「さっさと」は「ささと」と比べ、先行母音が長く、後続母音が短くなっていることがわかる。これらの先行研究から、日本語学習者の促音知覚において、先行母音や後続母音の持続時間の影響があり、それが1つの要因となり、促音知覚が

困難となっている可能性が考えられる。本研究で、英語を母語とする日本語学習者が促音を長音とする理由が促音の先行母音の長さを長音の長さだと知覚して解答した可能性も考えられる。

また、促音知覚を困難とさせる要因としてアクセント核、アクセント、促音位置も関係してくると考えられる。石澤（2013）では、英語を母語とする日本語学習者の特殊拍の知覚に関する調査をしており、子音[p]、[t]、[k]と母音[a]、[o]を用いて無意味語を作成し、調査したところ、促音に関しては、アクセント核の位置だけが知覚に影響していたと報告されている。石澤（2013）では、促音の後続子音が全て閉鎖音であり、摩擦音による結果はみられないが、摩擦音よりも困難ではないと考えられる閉鎖音において、そのような結果がもたらされたことから、アクセント核との関係についても調査する必要がある。さらに、本研究では、モーラ単位での促音知覚を試みたが、石澤（2011、2013）は音節単位での促音知覚実験を行っている。モーラ単位の分析だけではなく、音節単位での調査、分析も考慮に入れる必要がある。

## 7. まとめと今後の課題

本論文は英語を母語とする日本語学習者の促音知覚に関するものである。先行研究で得られた結果を基に仮説を設定し、調査を通してそれを検証することを目的とし、特に促音の後続子音に着目して考察するものである。その結果、促音の後続子音が摩擦音[s]、[ʃ]の方が閉鎖音[t]、[k]と比べて知覚が困難であることが分かった。また、促音の後続子音が閉鎖音のときよりも、誤答の数が多かった摩擦音のときの誤答の仕方をみると、促音を長音だと知覚している学習者が初級、中級ともに目立ち、促音知覚と長音知覚の両者に影響を与えていることが考えられた。本研究で述べた仮説（仮説Ⅰ：促音の後続子音が閉鎖音のときよりも、

摩擦音の方が促音知覚がより困難になる。仮説Ⅱ：後続子音が摩擦音のとき、促音を長音だと知覚する。)は、両者とも支持された。

本研究では、促音の後続子音に関する先行研究の検証で終わり、先行研究の問題点を明らかにするところまでは至らなかったが、アクセントやアクセント核、促音位置などを踏まえて、その問題点を明らかにしていきたい。今後の課題については以下の通りである。

### 1) 調査対象者数の増加

人数が 12 名と少ないデータでの分析であり、誤答をしたのはその内の 6 名で細かい分析に至らなかった。また、初級学習者でも全問正答したり、中級学習者でも誤答が多くいたり、個人差があった。初級と中級でレベルの差が見られたものの、個人差の影響も考える必要がある。今後はより多くの人数で調査し、一般性を出す必要がある。

### 2) 日本語母語話者の促音生成と促音知覚について

本研究は日本語学習者を対象とするものだったが、先行研究には、日本語母語話者を対象とした促音に関する研究が行われている。日本語母語話者がどのように促音を生成し、知覚するのかを調査し、日本語学習者と比較するといった観点から、日本語学習者の促音知覚が困難である理由を明らかにしていく調査も考えられる。

### 3) 長音知覚の調査の必要性

本研究では、促音を長音だと誤答する割合が初級、中級の学習者の中で目立っていた。このことから、日本語学習者の長音知覚についても調査し、促音との違いを明らかにする必要があると考えられる。また、長音をきちんと理解していないわけではなく、促音を含む語の先行母音が促音を含まない語の母音よりも長くなることから、大深 (2003)、大深・森・桐谷 (2005) の研究からも明らかになっていることから、長音と促音の先行母音についても調査していく必要があると考えられる。

#### 4) 母語習得研究

本調査では英語を母語とする日本語学習者の促音知覚をみる調査であったが、日本語を母語としていて、促音習得の過程にある子どもがどのような後続子音、アクセントを持った有促音語をまず発し、習得していくのかをみる必要があると考えられる。日本語母語話者と学習者の促音習得を比較し、学習者の促音生成や促音知覚について、今後の研究に生かせる要素があれば、考慮する必要がある。

#### 5) 初級学習者と中級学習者の知覚の違い

本調査で、初級学習者と中級学習者とでは誤答の仕方に違いが見られたものの、被験者の数が少なく、はっきりとしたレベルの違いは見られなかった。先行研究の問題点にも挙げたことであり、日本語学習者の促音知覚成績がレベルによってことなるのならば、成績が向上する理由はこういったものがあるのかを検討する必要がある。

## 【参考文献】

- 石澤徹 (2011) 「英語を母語とする日本語学習者における日本語促音の誤聴-アクセントと単語内の位置に着目して-」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第2部第60号 pp. 173-181 広島大学大学院教育学研究科
- \_\_\_\_\_ (2013) 「特殊モーラ知覚に対する重音節位置とアクセントによる影響-英語母語話者を対象に-」『小出記念日本語教育研究会 論文集』21号 pp. 19-30 小出記念日本語教育研究会
- 大深悦子 (2003) 「促音/tt/の知覚：アクセント型と促音・非促音語の音響的特徴による違い」『音声研究』第7巻 第1号 pp. 70-76 日本語音声学会
- 大深悦子・森庸子・桐谷滋 (2005) 「促音の知覚に対する先行・後続母音長の影響」『音声研究』第9巻 第2号 pp. 59-65 日本語音声学会

- 金田一春彦、林大、柴田武編（1988）『日本語百科大事典』 pp. 247、271、441 大修館書店
- 城生伯太郎編（2001）『日本教育学シリーズ〈第3巻〉コンピュータ音声学』 pp. 47-106 おうふう
- 戸田貴子（2003）「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究』第7巻 第2号 pp. 78-83 日本語音声学会
- \_\_\_\_\_（2007）「日本語教育における促音の問題」『音声研究』第11巻第1号 pp. 33-46 日本語音声学会
- 服部四郎（1960）『言語学の方法』 pp. 248 岩波書店
- 飛田良文編（2007）『日本語学研究辞典』 pp. 102、354 明治書院
- 平山輝男、大島一郎編（1975）『現代日本語の音声と方言 新・日本語講座3』 pp. 117、182、272 汐文社
- 日本語教育学会編（2005）『新版 日本語教育辞典』 pp. 13、16 大修館書店
- 皆川泰代（1996）「促音の識別におけるアクセント型と子音種の要因 韓国・タイ・中国・英・西語母語話者の場合」『平成8年度 日本語教育学会春季大会予稿集』 pp. 97-102 日本語教育学会
- 村木正武・中岡紀子（1990）「撥音と促音—英語・中国語話者の発音—」『講座日本語と日本語教育3 日本語の音声・音韻（下）』 pp. 139-177 明治書院
- 本橋美樹（2005）「英語話者による促音認識」『言語文化と日本語教育』30号 pp. 95-98 お茶の水女子大学
- \_\_\_\_\_（2010）「促音聞き取りにおける視覚情報の効果」『日本語教育論集』20号 pp. 43-52 関西外国語大学留学生別科
- 山田恒夫（1997）「アメリカ英語話者による日本語短母音・長母音・促音の学習 - 第2言語音声学習の基礎研究と教材開発に関わる諸問題 - 」『研究報告』99号 pp. 63-71 放送大学

## 要 旨

本論文は、英語を母語とする日本語学習者を対象にした、促音知覚に関するものである。先行研究から得た結果を検証し、英語を母語とする日本語学習者が促音知覚を困難とする原因を、特に促音の後続子音に注目して、考察することを目的とする。先行研究の結果から、2つの仮説（仮説Ⅰ：促音の後続子音が閉鎖音のときよりも、摩擦音のときは促音知覚がより困難になる。仮説Ⅱ：後続子音が摩擦音のとき、促音を長音だと知覚する。）を立て、検証を試みた。検証の結果、促音の後続子音が閉鎖音のときよりも、摩擦音のときは促音知覚が困難であることがわかった（仮説Ⅰ支持）。また、誤答の中で後続子音が摩擦音のとき促音を長音だとする結果が目立った（仮説Ⅱ支持）。この結果から、先行研究で述べられているように、促音の後続子音の摩擦音は促音知覚に影響を与えていることが考えられた。今後は促音の後続子音だけでなく、促音の先行母音、後続母音やアクセント、アクセント核、促音位置についても調査していく必要がある。

キーワード：促音知覚、後続子音、持続時間、促音、特殊拍、  
スペクトログラム

투 고 : 2013. 11. 30  
1차 심사 : 2013. 12. 14  
2차 심사 : 2014. 1. 4